

墨田区総合教育会議 議事録

1 日時等について

開催日	令和5年1月25日（水）		
場所	区議会第1委員会室（区役所17階）		
開会時刻	午前10時30分		
閉会時刻	正午		
出席者			
区 教 教 教 教 教	育 育 育 育 育	長 長 員 員 員 員	山本 亨 加藤 裕之 阿部 博道 浅松 三平 岸田 玲子 岡田 卓巳
説明のために出席した職員			
副 企 行 政 総 教 学 指 す 地 ひ	区 画 政 策 務 教 務 導 み 域 き	長 営 営 担 部 委 員 会 事 務 局 参 事 (庶務課長事務取扱) 課 室 教 育 研 究 所 長 支 援 課 長 図 書 館 長	高野 祐次 岸川 紀子 岐部 靖文 大野 勝 岩佐 一郎 須藤 浩司 西村 克己 加藤 康弘 宮本 佳代子 堀 啓一 有澤 恵美子

2 議題について

- (1) 墨田区教育施策大綱に係る教育課題について
これからの子どもに必要な力について

3 議事の内容について

午前10時30分開会

◎開会の辞

○区長 ただいまから、第17回墨田区総合教育会議を開会します。

本日は、墨田区教育施策大綱に係る教育課題である「これからの子どもたちに必要な力について」意見交換したいと考えています。

今回の議題の選定に当たっては、学習指導要領において「生きる力 学びの、その先へ」と目標が掲げられています。

また、墨田区基本計画では、「子どもたちに知・徳・体のバランスのとれた教育を行う」としています。

知・徳・体のバランスの取れた「生きる力」を育むには、何が必要なのかを見いだしていければと思っています。

◎議題 これからの子どもたちに必要な力について

○区長 まず、意見交換の前に、子どもたちにどのような力が求められているか、その背景を説明していただく必要があると思います。学習指導要領や教育施策大綱に記載されている内容について概要を説明いただきたいと思います。

加藤指導室長、お願いします。

○指導室長 資料1をご覧ください。

「学習指導要領解説 総則編」に記載されている育成を目指す主な資質・能力等についてご説明します。

平成28年の中央教育審議会答申において、予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来をつくっていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を、自ら考え、自らの可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生のづくり手となる力を身につけられるようにすることが重要であると示されました。こちらは、長年、学校教育で育成を目指している「生きる力」そのものであります。

「生きる力」とは、資料の上段の枠の中にある2点です。

基礎・基本を確実に身につけ、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見つけ、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質・能力。

2点目、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力になります。

この「生きる力」を具現化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力ですが、答申では、資料の緑色の矢印の下のように示されています。

まず、中段、矢印の下、左側の四角囲みをご覧ください。

「教科横断的な視点に立った資質・能力」になります。

教科の枠組みを超えて育成を目指す資質・能力、すなわちあらゆる教科等に共通した学習の基盤となる資質・能力や、教科等の学習を通じて身につけた力を統合的に活用して、現代的な諸課題に対応していくための資質・能力を、教育課程全体を見渡して育んでいくことが

重要とされています。

その下の段に「学習の基盤となる資質・能力」があります。

言語能力、情報活用能力、そして問題発見・解決能力の、大きく分けて3つが例示されています。

言語能力は、その基盤は言葉です。言葉は、児童・生徒の学習活動を支える重要な役割を果たすもので、全ての教科等における資質・能力の育成、学習の基盤となるものです。

言語能力の向上は、児童・生徒の学びの質の向上や、資質・能力の育成の在り方に関わる重要な課題として受け止め、重視していくことが求められています。

情報活用能力は、世の中の様々な事象を情報とその結びつきと捉え、情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用し、問題の発見・解決をしたり、自分の考えを形成していくために必要な資質・能力です。

問題発見・解決能力は、物事の中から問題を見だし、その解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、振り返って次の問題解決につなげていく資質・能力です。

次に、矢印右側の「現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力」です。

記載のとおりで、これは「生きる力」の育成という目標を、各学校の特色を生かした教育課程の編成により具現化していくに当たり、豊かな人間性の実現や、災害等乗り越えて次代の社会を形成することに向けた諸課題に照らして必要となる資質・能力、それぞれの教科等の役割を明確にしながら育んでいくことができるよう示されているものです。

詳細につきましては、資料をご参照ください。

最後に、一番下の段、「探究課題の解決を通して育成を目指す資質・能力」についてです。

こちらは、主に総合的な学習の時間を通じて育む資質・能力として示されています。この資質・能力は、やがて道徳教育にもつながるものと考えております。

説明は以上になります。

○区長 次に、昨年度改定した「教育施策大綱」では、本区の目指す子どもの将来像について定めています。これらの説明について、須藤参事お願いします。

○教育委員会事務局参事（庶務課長事務取扱）

資料2をご覧ください。昨年度改定いたしました「教育施策大綱」の中で、本区が目指す子ども将来像について、抜粋してご説明いたします。

教育施策大綱では、本区が目指す子どもの将来像として2つ掲げています。

1つ目は、「将来、社会で活躍し、地域に貢献できる自立した人」です。具体的には、「感性豊かでいろいろなことに興味・関心をもって学び、実践できる人」「自己肯定感を育みながら、まわりの人の立場や気持ちを思いやることができる人」「スポーツや遊びを通じて、健やかな体を育むことができる人」でございます。

2つ目は、「郷土に誇りをもち、異文化とも敬意をもって積極的に交流できる国際感覚のある人」でございます。

説明は以上になります。

○区長 須藤参事から、教育施策大綱の目指す子どもの将来像について、簡潔にご説明いただきました。

最初に加藤指導室長から説明があった学習指導要領ですが、「生きる力」について、よく

整理されていて、キーワードがたくさん入っていると思いました。

これらを踏まえて、今日は、これからの子どもに必要な力について具体的に意見交換を行いたいと考えています。

まず、私からお話させていただきます。先ほど、本区が目指す子どもの将来像にもございましたが、私は一貫して、すみだの子どもたちが夢や希望を持って、目標に向かって、勉強もスポーツも、そのほかにも頑張ってもらいたいと考えています。それから、環境を整えていくというのも私たちの仕事だという思いでやってきています。こうした今までの説明のとおり、子どもたちが将来の予測困難な時代を生きていくためには、知・徳・体のバランスの取れた「生きる力」を育てていく必要があるため、そのための支援を徹底的にしていきたいと考えています。

教育施策大綱でも、以前の総合教育会議の中でもテーマにしました非認知能力の向上を新たな施策で盛り込んでおり、教科の学習だけではなく、幼児期からの非認知能力を高めるための取組を進めています。

いろいろ言い方はありますが、失敗しても立ち上がって進む力であったり、正解のない課題に子どもたちが協力をして取り組む力、すみだの未来を担う子どもたちに必要な力というのは今何なのかということです。

今、説明のあった学習指導要領や教育施策大綱の範囲に限定をせず広い視点で、今日は意見交換をさせていただければと思っています。

それぞれの立場から、いろいろなご意見をいただければと思います。

まずは私の考えを申し上げます。

ここへ来て、いろいろな世界情勢であったり、それから社会の変化、スピードが速いと感じています。子どもたちは、この中で、小学校、中学校で勉強しながら、そして学校生活を楽しみながら頑張っている。コロナ禍での生活も3年間ということで、非常に子どもたちにとっては大変だと思っています。

それから、グローバル化やDXの時代だと言われているのと、加藤教育長が常々言われている、本当に将来の予測が困難な時代において、子どもたちにはどのような力が必要なのか、教育委員の皆様それぞれのお考えをお聞きしたいと思っています。

テーマは幅広ですが、皆様方にご意見を伺いながら、いただいたご意見についてさらに意見交換していきたいと思っています。

それでは、最初に、阿部委員からお願いします。私が今申し上げたようなことを含めて、ご意見を頂戴できればと思います。

○阿部委員 「生きる力」というのは非常に範囲が広いですが、まず、私が考えたのは、なぜこれから「生きる力」が必要とされるのか、なぜ「生きる力」が問題となるのかということです。おっしゃるとおり、グローバル化、高度情報化が飛躍的に進み、これから子どもたちが大人になったときにどんな未来が待ち受けているのか、予測や準備することが難しい、スピードの速い時代になってきています。そのため、どんな時代、どんな社会になっても生き抜いていくためには、自分でいろいろな情報を集めて判断し、あるいは考えて、仲間ともいろいろ相談して、臨機応変に対応するということがまず必要なことと考えます。そして、最終的に自分の力で、自分が考えて、自分の道を切り開いていく、そういう力がないと、変化に

対応できないだろうと思います。

少し話が飛びますが、最近聞いて素敵だなと思った言葉を引用したいと思います。コンピューター学者のアラン・ケイさんが言った「未来を予測する最良の方法は、未来を創造することだ」という言葉があります。いろいろ予測不能な、予測ができない時代に対して、恐れや不安ともあるでしょうけれども、やはりポジティブに何かに向かって創造していくような活力があれば、子どもたちは次の時代を切り開いていけるだろうと、そのような印象を持っています。

○区長 ありがとうございます。

阿部委員からご意見、また、アラン・ケイさんの言葉を引用して未来を創造する力についてお話いただきました。

自分が子どもだった頃と比べると、皆さん同じだと思いますが、将来が予測できないとか、なかなか時代のスピードの変化が速い時代になったと感じています。逆に、今の子どもたちは、多分そういうことも感じながら、学校に楽しく通っているのかなと思います。

それから、今おっしゃったように、臨機応変というのは子どもにとってはなかなか難しい対応能力だなと思いますが、でも、実はそれが必要な力にまた直結するのではないかと、今ご意見を聞いて思いました。

臨機応変にというのは、子どもたちにとって、普段の生活の中でも大変だと思います。

阿部委員、今お話になったところから、そういう大変なことを子どもたちに求めていく、未来を創造することは大変だということも、もう少し深くお話しいただければと思います。

○阿部委員 例えば、高度情報化社会というのは、今はiPadを子どもが1人1台持って、教科書に書いてあるレベルをはるかに超えたいろいろな情報を自分で引き出すことができます。ただ、いろいろな一次情報が氾濫しているので、その情報のどれが正しいのかを選んだりする、そういう過程が大事になってくる。昔は教科書で学んだことや新聞などを読んでいれば大体のことは分かったかも知れませんが、今はそうではない。それを自分の力でいろいろ学び、あるいは取捨選択し、周囲と協議しながら、あるべき自分が望む方向を自分で決めなくてはいけない。そういう意味で、創造するとは自分が自身の未来を切り開く、そういうことだろうと理解しています。

○区長 ありがとうございます。

それでは、浅松委員、お願いいたします。

○浅松委員 端的に言うと、これからの子どもたちに必要な力、先ほど説明があった学習指導要領に出てくる「生きる力」というのは実際にどんなものか。これは、実はもう27年前の学習指導要領改訂のときに、中教審が一次答申の中で言っています。つまり、基礎的な知識、それから、それを活用して自分で考え、判断し、そして表現するということ。これは、私が教頭の時代に、平成9年辺りですが、そこから始まっています。学校ではちょうどコンピューター室、つまりICTと今は言われていますが、それがようやく配備された時代です。携帯電話が普及し始めた時代でもあります。そのときの社会の状況での「生きる力」、今現在、新学習指導要領でうたわれている文言とはほとんど一緒ですが、時代背景が違うということをもっと頭に置いておいたほうがいいと思います。

私は、そういう中でスキルの的には、やはり探究する力、これではないかなと思います。令

和の日本型学校教育の在り方というのが2、3年前に文科省から出ていますが、その中でも、探究する力です。そして、探究する力の土台となるのが、やはり学習のプロセスの中での知識の習得、そしてその知識を使って考える、活用していく力だと考えます。いわゆる学習のプロセスの最後の部分では、今、小・中学校の「総合的な学習の時間」、高校では昨年からはまった「総合的な探究の時間」というのがありますが、まさに探究の学びがこれからの子どもたちに必要な「生きる力」につながると思います。探究する力には、挑戦する意欲、それから自ら考えて学んでいく力が含まれる。最後に、読解する力。これはやはり情報収集だけではなくて、その情報をどのように読み解いて、根拠はどこにあるのかということまで考える、読解力というのが必要になってくると思います。

そういった意味で、特に探究を支える力となるのは読解力だと思っています。

○区長 ありがとうございます。探究する力、それを支えるのが読解力というキーワードが出てきました。後ほど、また全委員の皆さんと、今のお話についても意見を深めていきたいと思っています。

それでは、岸田委員、お願いいたします。

○岸田委員 「生きる力」ということですが、学校はまずそういうことを考えると、生きる力、生きる術を学べる第一歩だと思っています。幼稚園、保育園から始まって、小学校、中学校、高校と、自分の住む世界が大きく、広がっていく中で、自分がどう動いていくのか、また、友達とどう関わるのか、先生との関わり方、それから周りの大人との関わり方、そういうことを学ばせてくれる、体験の場であるのが学校ではないかと思っています。

そこには、失敗も挫折も含まれてくると思います。よく小学校から頂く学校だよりも、学校の行事の成功の話が出ていますが、まず校長先生たちが書くのは、成功したことよりも、まずみんなで助け合ってやったこと、それから失敗も大切なことなんだという、そのプロセスをすごくどの学校も学校だよりも書かれています。ですから、学校もそのことを伝えたいということで、みんな指導されているのだと思っています。

あと、もう一つ、先ほどの学習指導要領の自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動しということですが、これがこのように強調されてしまうと、私はかえって、失敗したのは自己責任だろうというふうに流れてしまわないように、先生たちに伝えてほしいのは、本当に困ったときには助けてくれる大人もいるし、そして社会に出ても助ける術は、行政等を含めてあるんだということをどこかで伝えてほしいと思っています。

なぜならば、成人が18歳になり、18歳でローンを組めるようになりましたが、20歳ぐらいになって借金を抱えて苦しんでしまうというような姿を私は見たくありませんので、何とか学校で、助けを求められる、SOSはいつでも出せるということを伝えてほしい。それがまた「生きる力」になってほしいと思っています。

以上です。

○区長 ありがとうございます。

それでは、最後に、岡田委員お願いします。

○岡田委員 私もほかの委員の方と同様に、やはりとにかく自分の頭で考える力というのを子どもたちにはつけてもらいたいと思います。将来、未来を予測できないというのは、本当に私自身も感じています。去年までの常識が今年はまだ非常識になってしまったり、今の正解

も恐らく1年後、2年後には不正解になっていたりすると思います。とにかく、過去の常識が通用しない時代になっており、これからは、自分で考えて、自分の価値観を実現する、そういう子どもになってほしいと、我が子を含めてそう思っています。

先ほど来、多様な、本当に今はたくさんの情報があって、子どもたちがそれをいとも簡単にアクセスしているというお話がありました。それはそれとして、実際に自分の子どもを見ていると、確かにテクニックとしての情報にはアクセスしているのですが、むしろ我々が子どもの頃よりももっともって一元的な情報であると思います。我々の頃は、テレビだって何だって、週に1回、その時間にテレビの前になければ見られませんでした。今の子どもたちは欲しい情報だけを繰り返し何度も何度も大量に浴び続けているように見受けられます。

ですから、家庭での教育ももちろん大事だと思いますが、学校の教育現場の先生方には、ぜひ子どもたちに多様な価値観がある、もっとこういう情報があるということをや々教えていただきたいと思っています。

もう一つ、自分の頭で考えたことをしっかりと表現する力、それは恐らく言語能力に帰着すると思いますが、そういうトレーニングを教育の中でしていただきたいと思っています。

仕事上で、司法試験に受かった、まだデビュー前の修習生のお世話する仕事を十数年やっているのですが、本当に自分が学生だった頃、あるいは弁護士になったばかりの頃に比べて、驚くほどプレゼンテーション能力の高い子たちが見受けられます。

先日の「はたちのつどい」の実行委員の方々は本当に素晴らしいと思いましたが、ああいう若者を見ると、多分この何十年間の日本の教育というのは間違っていなかった、明らかにレベルアップしていると思う反面、娘の友達なんかを見ていると、やはり家庭環境に恵まれていなくて、人前でなかなか積極的になれない「声の小さい子」が相当数いるという現実があります。そのような子たちを教員の方々がいろいろなチャンス、価値観や経験、そういうものを示してあげて、自分で考え、行動する力を伸ばして欲しいというのが親としての願いです。

以上です。

○**区長** ありがとうございます。

4人の委員の皆さんそれぞれから、皆さんの考える「生きる力」についてお話いただきました。その中で、それぞれの皆さんからキーワードを頂戴できたと思います。

加藤教育長に1点確認したいのですが、今の皆さんのお話の中で、正解がなかなか見えない世の中、社会だということであったり、私が先ほど言った社会の変化、子どもたちが、小学校でいえば6年間、中学校でいえば3年間という学校生活を、9年というタームで動くわけですが、この間のスピードの変化であったり、今言うDXやグローバル化、それからもう今iPadをそれぞれ持っている中であって、学校現場で「生きる力」を身につけていくということになります。その前提として、社会の変化の動きみたいなものを、教育長としてどのように捉えて、注意していく必要があるのか。逆に、子どもたちが自ら学ぶ力をつけるためにどういうふうに通っていくのが学校現場や大人の役目でもあるので、時代の変化、高度情報化社会をとというものを、加藤教育長はどんなふうにお考えになっているのか、聞かせていただければと思います。

○**教育長** 変化が激しい、予測困難ということは、要するに通常考えるよりも、さらにそうい

う激しい変化、それとあとスピードが速く社会が動いているというのがあると思います。

それで、学校教育の中では、不易流行があって、学校で中心的に学ばなければいけないのは、やはり人格形成だとか知・徳・体にバランスが取れた子の育成というのは、不易だと思います。それで、今後、流行についてはどうやって捉えていくかという話になってくると、なかなか捉えていくのが難しい。要するに、学習指導要領も日本では10年に1回改訂になりますので、そうすると10年だともう一昔になってしまって、なかなか難しいとなります。ただ、大きな捉え方として、予測困難というのはすでに学習指導要領に入っていますので、その中で、どうやって学習指導要領を現実的に学校教育の中で取り入れていくかというのが大きな課題になると思います。

それで、今、実際には、先ほど加藤指導室長が説明したように、学校教育の中であらゆることをいろいろやっています。その上で、私が前から思っているのが、昔は、子どもたちは学校に行けば自然に勉強だけではなく、友達とけんかしたりとかいろいろあって、先生が中に入って、そこで人格形成ができていたと思います。しかし、今はそうではなく、実際に家に帰ったときに、夜でもSNSでやり取りができます。そういったことで、ありとあらゆることが従来のやり方では、なかなか難しくなってきたので、日々、実態に合わせていかなければならないと思います。ただし、そこに惑わされるのではなくて、先ほどお話ししたように、不易というのがあるので、その不易を基本に考えていけば、解決していけると思います。ただし、流行も重要なので、流行については、学校で時代に合ったものが必要になってくると思います。

それで、先ほど岸田委員が言われたように、経験豊富な地域の皆さんに学校の中に入って活動してもらうことで、子どもの経験の少なさを補うことができると思います。もちろん、それだけで完全に補えるということではないのですが、今後そういった地域の方の関わりが、大事になってくると考えます。

以上です。

○区長 ありがとうございます。

どういう世の中で、今、注意すべき点は何か、そういう世の中の中で「生きる力」をどうやって育てていけばよいのか確認させていただきました。

今、皆さんからそれぞれお話しいただいたキーワードについて、また意見交換したいと思います。

1つは自ら学ぶ力。皆さん共通して同じようなお話もございました。先ほど言ったように、この環境の中で導いていくのが大人であり、学校の先生方だと思いますが、皆さんの話を聞いていて、自ら学ぶ力を子どもにどうやって持ってもらうのかは結構大変なことであると思いました。

それからもう一つは、探究する力です。物事を掘り下げて探究していく力をどうやって身につけていくのか。そのためには読解力をつける必要があるというご指摘もありました。先ほど、阿部委員から未来を創造するというお話がありましたが、ぜひその辺、自ら学ぶ力、それから探究する力についてご意見があればお聞かせください。

○阿部委員 まず、教育長が言われたように、不易な部分としては、もちろん読解力とか、基礎的な算数の計算だとか九九だとか、あるいは漢字とか、基本的なことは必須です。それが

ないのに探究心を求めても無理なので、まず基礎をきちんと学校で、あるいは保護者が身につけさせるということが必要だと思います。

さらに、その次の探究心を養うということについては、私は学校の授業で、子どもたちにそういうインセンティブを与えることは可能だと思います。事例として、先日、私は錦糸中学校の研究発表会に参加したのですが、そこでタキソノミーテーブルという手法を使って、1年生の地理の授業をしていました。そこではiPadとインターネットを使って、アフリカのジンバブエの地理を勉強するのに、教室と元ジンバブエ大使のお宅とをインターネットでつないで、対面授業を実施していました。生徒が数班に分かれてそれぞれのテーマを発表したのを大使が聞き、大使が今度は自分の見解を述べるという授業がありました。その過程で、私になるほどと思ったのは、授業の進め方として、ジンバブエの歴史や沿革を縦軸に、世界の中におけるジンバブエの地理的状況や経済状況を横軸に、これをGDPや人口といった客観的なデータを参照しながら、ジンバブエという国全体を俯瞰する学習ができたと感じたからです。要するに、どういう経過を経てジンバブエが植民地から独立して今の状況になったか、そして今世界の中でジンバブエが置かれている立場はどのようなものか、これからどのように発展していくかを、産業や経済力をGDPや人口といった客観的データを使って説明され、最後に大使がアフリカ大陸の国々の未来を予測する話をされたわけです。中学校1年生で分かるのかなと思うような中身の濃い授業でしたが、子どもたちがとても関心を持って、そういういろいろなデータを基に状況を分析する学習にトライしていました。これが学習指導要領の主体的・対話的で深い学びの一端なのかなと思って、大変興味深いすばらしい授業だなと思いました。

こういう授業の方法によっても、子どもたちの関心や探究心を引き出すというのは可能だと思います。ぜひいろいろ取り組んでいただければと思います。

○**区長** 教育委員さんとして現場に行って、その実体験を視察した上で、今、自ら学ぶ力の説明と、それから探究心の一例として、手法も含めて、しかもiPadを活用した形での授業風景というのが、探究心につながるんだというお話、非常に分かりやすい事例も含めて、ありがとうございました。

浅松委員は、いかがでしょうか。

○**浅松委員** 私も実は錦糸中学校の研究発表会の前に、文化中学校の研究発表会で社会科の授業を見ました。社会の授業の中で、欧米、特に北欧並みの社会保障を日本でも目指すべきかどうかというテーマでグループに分かれて学習していました。そこでは、ロイロノートという学習アプリを使って、普段おとなしい、あまり手を挙げて発言できない子どももタブレットに意見を書き込んで、グループ内で発表し合います。そこではただ見せ合うだけではなく、今度は言葉で、書いてあるものを分かりやすく説明するということをしていました。やはり文章ではなかなか伝わらないところもあるので、いかにうまく相手に伝えていくか一生懸命苦労してやっていました。

その結果、相手の考えを自分の意見に取り入れて、さらに教員から最終的に自分の考えをまとめるようにという指示がありました。まだ3年目の社会科の教員だったのですが、非常に授業の構成がすばらしくて、タブレットを上手く活用していました。まさに墨田区のGIGAスクール構想を、本当に徹底していて、紙ベースではなく、タブレットをツールとして

使いこなすことによって、よりコミュニケーションを深めていっていました。私はやはり、探究する力の先には、じっくり考えて、根拠を示して相手に伝える力が必要だと思えます。それが結局、探究心の中に含まれているコミュニケーション能力だし、そしてお互いの意見をまとめながら取り入れていくという、コラボとよく言いますが、協働していくコラボレーション能力もやはり必要だと思えます。

また、そうやっているいろいろ工夫している先生方を見て、これまでの墨田区の方向性は間違っていないのだと感じました。

もう一つ言わせてもらおうと、今度の学力向上新3か年計画の第3次の基本方針の中で示された墨田区教育委員会教育目標で掲げられた、「挑戦する力」、「つながる力」、「役立つ力」、この3つの力は、本当にすばらしいと思えます。これを踏まえて、各小・中学校の総合的な時間における探究学習の一層の推進ということで、最初の方針にもきちんとうたっている。4～5年後には次の学習指導要領が告示されるはずで、そこから、「生きる力」もどんどん中身も変わっていくと思うので、そういった意味でも、やはり教育委員会がしっかりと新しいこれからの教育、身につけてほしい子どもたちの必要な学力ということ踏まえて、きちんと捉えている視点はすばらしいと私は思っています。

以上です。

○区長 加藤教育長、お願いします。

○教育長 今、浅松委員が言われたことについての補足ですが、先ほど阿部委員も言われたように、一定の学力がないと、ただ探究をやったとしても、やはり学びが深まらないと思えます。要するに、すみだの子どもたちは今、学力が上がってきていますので、それを捉えて、探究を今回1つの柱にしました。基礎的な学力がないと、あまり効果がなくて、学力がついてきたからこそ、探究ということが、子どもたちにきちんと影響を与えられるということです。

○区長 確かに、学年にもよりますし、成長度合いにもよります。個々の感じ方、考え方もあるというのはおっしゃるとおりだと思います。今お話を伺っていて、私も学校現場に行きたいと思いましたが、委員の皆さんに現場がどうなっているのかが分かるお話をさせていただいて大変ありがたく思います。先生方が非常に頑張っている風景が目には浮かびました。実際に教育現場に行ってもらって、そして、教育総合会議の場でもご披露いただけるということは非常にありがたい。学校の先生方にも励みになるのではないかと思います。

さらに、今、浅松委員のお話では、タブレットをうまく活用しているということで、阿部委員からも同じようなお話がありました。タブレットをうまく活用しているというのが1つの共通点でもあり、岡田委員が言っていた表現力が大事だということに、普段少し内気なお子さんがいても、タブレットを使って平等に回答ないし考えが書ける。書いたものをグループの中で、みんなで議論し合う。そこで発言をして、それが伝える力につながっていくというお話でした。これも非常に分かりやすい一例だなと思えます。また、そういう中で、探究心、探究する力も身につけていくという大変分かりやすい事例を2つお話いただきました。

では、岸田委員、お願いいたします。

○岸田委員 私も第二寺島小学校の研究授業に出させていただきますが、浜野製作所にみんな

なで行った昨年の6年生のお話ですが、そのときに、いつもはそんなに積極的でない子が一番前に来て、製品について一生懸命質問して、さらにはグループでまとめる話があったのですが、その子が一生懸命、中心となって、意見をまとめようとリーダーシップを取っていました。先生からは、いつもはこんなに前へ出る子ではないのですがという話がありました。だから、その場その場で、一つ一つの体験によって、リーダーという形ではないけれども、自分の意見を言える場面があるということはずばらしいと思いました。

そして、特別支援学級のほうで、「嫌いな給食」という題で、それでメニューを考えようというような授業だったのですが、アンケートを全部自分たちでタブレットを使って集計していました。全部自分たちで考えたそうで、すごいと思いました。

やはり、タブレットというのは、1つにはそういった点で、言葉では言えなくても、そうやってアンケートを取ったり、大変重要なツールなのだということを実感しました。また、子どもたちのとても生き生きとした姿が印象的でした。

○**区長** 先ほど、自ら学ぶ力とか探究する力を大人が導いてあげる必要があるというテーマでお話がありましたが、岸田委員の今のお話を聞いて、導き方がそれぞれあって、学校現場では、本当にいろいろ工夫して引き出しているということがよく分かりました。

それから、今のお話でいうと、浜野製作所さんのような地域の大人がいろいろな体験や経験を話すことで、そのことがきっかけとなり、子どもが生き生きと前向きに取り組めて、積極的に意見をまとめていくことにつながったという話を聞くと、やはり最終的に「生きる力」につながっていくのだと思いました。また、そのためには、環境づくりや興味を持たせる工夫をしていくことがいかに大事かということを感じました。一例ですが、こういうことを墨田区の教育の中で繰り返しやっていくというのは、墨田区ならではということも含めて、とてもいいお話が聞けたと思いました。

それでは、岡田委員、お願いいたします。

○**岡田委員** 私はもう少し学校での授業の取組といったような、ちょっと進んだところではなくて、もう少し基本的な話として、子どもたち、特に小学校に進学したばかりの小さなお子さんや小学校の子どもたちに、できるだけ自分で考える、先生の顔をうかがいながら何が正解かということを探るのではなくて、自分で考えることを覚えてもらうというためには、非常にベーシックなことですが、とにかく大人が正解を顔に出さないことが大事だと思います。自分自身、今思い返すと、本当に先生の顔をうかがいながら、今先生喜んでいるからこれはいい答えだったのかなというようなことをずっと繰り返していた気がします。そのぐらい子どもというのは、大人、両親の顔色を見ますし、なかなか技術的には難しいと思いますが、できるだけ正解に導くだけではないことを先生方には教えていただきたい。

その次に、どうやったら自分で考えられるのかといえば、阿部委員ご指摘のように、まず基本的な知識がなければいけない。それがなければ物事を組み立てられない、興味を持たないということだと思います。知識以外では、やはりいろいろな世界がある、こういう仕事がある、こういう人がいる、こういう街があるということによって、興味だったり、探究心というのを子どもは広げていくと思います。それがまさに昔は社会科見学に行ったり、テレビで見るぐらいしか、自分の身近でない世界を知る機会というのがなかったのが、今は幸い通信技術の発展で非常にいろいろなことが可能になるのだと思います。

少し違う話ですが、先日、中P連の研修に行ったとき、eスポーツ、つまりインターネットのソーシャルゲームで非常に活躍された方のお話の中で非常に印象深かったお話があります。ひきこもりになって、学校に行けない子がeスポーツで世界のすごい強豪とつながって、とても活躍しているというお話です。それはインターネットのプラスの面ですが、先ほどなかなかふだんは発表できない子も、タブレットの中ではきちんと自分の考えをまとめられる。ふだんひきこもっている子も、仮想空間ではすごく積極的になれる、そういうことができるのが、インターネット、ICTのプラスの側面だと思いますので、教育現場でもっと活用して欲しいと思います。

○**区長** お話いただいた事例は、現代ならではのお話で、そういうことも当然この時代はあると思いますし、その子にとっては自分はこれができるという自信、自己肯定感にもつながる。それは、生きていくための自信という意味では大変いい事例だと思います。

それから、もう1点、今おっしゃった御自分の体験も含めて、当時の教育は統一の基準の下で、答えがこれなので、ここにみんなが行くようにという、ある意味、詰め込み方式なんかもそういう側面があったと思います。そうやっていったものが、岡田委員からすれば、なるべく答えは出さないようにして、1つ今興味深いお話は、教員と子どもの距離感というところを今おっしゃったのだと思います。先生がいかに子どもの能力を引き出し、正解を見いだすために自分で考えるようにするにはという、教員のスキルまたは距離感、この辺は大人にも通じるお話でもあったと思いますが、大変面白い視点のご指摘でした。

学校現場や、それから教員のスキルや距離感、またはICTの活用のいい事例のお話をいただきましたが、教育長に今の4人の委員さんのお話をまとめていただければと思います。

○**教育長** 自ら学ぶ、探究するというお話については、一人で考えるだけでなくグループで考えたり話し合うことによって、さらに理解が深まるということもありますので、そういったことも必要になってくると思います。

それから、先ほど興味というお話がありましたが、私は学校運営の中で一番難しいのが、いかに興味を持たせ続けるかということだと思います。例えば理科が好きな子がいて、でも、理科の勉強ができない。そうすると、いつの間にか興味がなくなってしまう。理科が好きで、生き生きとした子どもがいたら、それを捉えて、勉強の仕方とか内容について直接的に教えるのではなく、例えば、こういうことを今度調べてみたらと伝えて、授業の少し先取りみたいな形で調べさせるという方法も有効だと思います。そうすれば、実際に授業で聞いたときに、先に調べているので、子どもはすごく理解が深まっている。教員には、そういった興味を持たせ続ける仕掛けづくりや工夫が必要で、それが教員のスキルアップにもつながっていくのだと思います。

それから、ICTの活用について、今、墨田区では各学校でやっていますが、教育委員会でスタンダードを示して、教員を選抜して研究してもらって、それで授業発表ということで考えていますので、すみだでは、全学校が同じレベルに達するような形で、今ステップアップを考えてもらっています。

それから、あとは距離感については、昔よりも距離感はすごく近いと思います。昔は、先生が怖くて、あまり近寄れませんでした。でも、昔の先生の何がよかったかということ、子どもが何かあったときに近寄ってきてくれるところです。子どもが近寄るのではなくて、先生

の方から近寄ってきてくれたのですが、今はあまりにも近過ぎるので、心配があって先生が来てくれるということではなくて、いつも近いから、逆に相談できないということがあって、先ほど岸田委員が言われたように、SOSの出し方、誰かとつながって、解決してもらおうという、そういったこともやはりちょっと昔と違って薄れているのではないかと思います。昔は、自分の家に帰ったらおじいちゃん、おばあちゃんがいて、それで何かおじいちゃん、おばあちゃんと話をすると、適切なアドバイスをしてくれました。今はやはり難しいのは、子どもたちがかなり高度情報化した中に暮らしていて、何かに価値観を求めるといのは結構難しく、それでいて情報があまりにもたくさんあり過ぎて、昔の子どもは嫌なことがあったらすぐ言っていたのが、今はいろいろな情報が入ってきて、果たして本当に言っているのかどうか迷ってしまう。そういったこともあるので、それはきちんと教育委員会でも、SOSの出し方については、ICTを活用してもいいし、都に電話してもいいといった話もしています。しかし、距離感のことや教員のスキルのこともあるので、相談しやすいようにしていくように研修をしているところです。

○区長 ありがとうございます。

いろいろご意見いただきましたが、その中で、失敗と挫折の繰り返しというか、そこから立ち上がる、またはみんなで助け合ってそういう壁を乗り越えていくというのも子どもたちが、大人でもこれは同じですけれども、学校生活の中でうまく経験をしていくと、「生きる力」に結びついていくというご意見でした。

さらに、私は、職員にもよく言うのですが、スモールチャレンジでもいいから、とにかくチャレンジしようと。大きな目標を持つことも大事だが、小さな目標を達成する成功体験を重ねていくと、自信になって、さらに成長することができる。子どもにとって、成功体験を繰り返していくことは、大変重要ですが、失敗、挫折、それから成功体験、この辺の経験を持つことによって「生きる力」に結びつくという意味で、皆さんが考える事例も含めて、何かあればお伺いしたいと思います。

先ほど岸田委員がその辺のお話をされましたが、さらに詳しくお願いします。

○岸田委員 小学校に上がってすぐというのは、意外にトラブルが多いものです。自分の子どものことを考えてもそうです。とんでもない時間に友達と約束したりとか、勝手に友だちを連れてきて、その子は帰る道順が分からなくて、家まで送っていったこともありました。そしてだんだん学年が上がるにつれてトラブルは少なくなっていきました。先ほど先生との距離感というお話がありましたが、人と人の距離感というのはそういうところから出てくるのではないかと思います。というのは、やはり苦手なタイプの子どものというのは、自分とは全くタイプが違う子がいたりとかすると、それに関してはちょっと距離を置いてみようと考えますし、グループでやったときには、互いに力を合わせてやれば、うまくできたということの成功体験にもなります。また、助けたり助けられたりということが自分の成長にもつながっていく、それは感じてはいないかもしれませんが、大人になったときに1つの糧となるのではないかと思います。

それで、今、実はステップ学級の先生と20年来お付き合いがあって、そこで卒業生が後輩の子どもに残した言葉というのがあります。高校が決まってからの言葉ですが、一文を読みます。

「誰だって心の中で怖がっているはず。でも、乗り越えたときの喜びは半端じゃない。どんな結果でも、自分は心から頑張ったと心から言える、そのためにも、今どんなに苦しくても諦めるな」

これは学校で友達関係がうまくいかなかった子が、ステップ学級の先生と交流したことによって無事卒業できて、最後に卒業生として後輩に残した言葉です。もちろん、行っていた学校は何にもしていないということではなくて、恐らくこの文章を書けたということは、この子自身の成長があったから、最後にこの言葉が残せたのではないかと思っています。すごく印象に残った2011年の卒業アルバムなのですが、この子の夢は弁護士になることでした。それもすごくいいなと思いましたが、実際に、今どうしているのかというと、すごく元気なお母さんになっているという報告を受けました。私は、これは失敗してもやり直しが利く、そして自分で考えた結果がこの文章に出ているのではないかと思い、ぜひこの会議で発表しなくて読ませていただきました。

以上です。

○**区長** 大変分かりやすいというか、事例として非常に感動も含めて、いい事例だと思いますし、そういうことを子どもたちは成長の中で、またはその人生の中でいろいろな思いを持って動いているんだというのが非常によく分かりました。それが挫折だったのかどうか分かりませんが、失敗したり、つらい思いをしたりしながらそれを乗り越えたということだと思います。

阿部委員、失敗、挫折について、何かご意見ありますか。

○**阿部委員** 失敗、挫折の経験はたくさんありますが、どちらかと言えば私はあまり失敗や挫折を苦にもしかたないと思っていました。その背景には、やれるだけのことをやった結果なら、うまくいなくても受け入れるしかないし、また考え直してやればいいやというある意味楽観的な気持ちを持っていたのかも知れません。失敗や挫折がヒントとなって次のステップに進めることもあったので、単純にその1点だけ捉えれば、失敗とか挫折かもしれないけれども、長い人生の中でそんなことは大波小波、幾らもあるわけなので、あまり深刻に考えても意味がないだろうと思っています。

子どもたちも、何か失敗とか挫折があったら落ち込んでしまって、そこから立ち上がれなくなってしまうのが一番困ると思いますが、やはりそこで自己肯定感があって、自分を客観的に見て受け入れられる人だったら、失敗しようが何しようが、また立ち上がれると思っています。何か一度失敗したら、もう自分は駄目だ、駄目な人間なんだなんて思い込むことのないような、そういう肯定的な、ポジティブな気持ちに子どもたちがなれば良いと思いますし、そういう発想のトレーニングも必要だと思っています。

○**区長** 気持ちの切り替え、失敗を苦にしないで乗り越える強い気持ちが大事というお話でした。それから、やはり、人によっては結構深刻に考えてしまうお子さんがいる中で、学校現場や親、地域がよく観察をしながら、子どもの成長を促していくということが必要だと思います。

浅松委員、いかがでしょうか。

○**浅松委員** 周りの子ども、仲間に支えられて困難に打ち克つ、はい上がるという場面は、学校現場を経験している私ですと、大抵特別活動の行事のときだと思います。そのときに協働

して、消極的な子も仲間に入れて、支え合ったりとか、葛藤とかも含めていろいろな経験ができます。それと、やはり部活動の中でも仲間関係とか、技術の向上も含めていろいろな経験ができます。

最近、ICT化も進み、授業のスタイルが変わった中で、授業で子ども同士が支え合うとか、さっき言った協働するという部分で、私がこの間文花中学校の研究発表会を見たときも、おとなしい子に声をかけて、君の言っていることはこういうことだねっていう、まさに先生がやってほしい部分もあるのですが、授業の中で子ども同士にそれをやらせている先生がいてとても新鮮に思いました。

教師主導型の授業だと、問いかけと、先生と子どものやり取りで終わってしまうことが多かったのですが、授業改善が進み、ICT化の中でこれは1つの成果なのだと感じました。

○**区長** きっかけが大事ということだと思います。それから、それを引き出すのは何も教員、担任だけではなく、助け合い、支えというところにも最後はつながるのだと思いますが、それを引き出してくれるのは友達であり、同級生だったりもする。クラブ活動だと先輩、後輩であり、非常にこれも分かりやすい。

もし、そういうきっかけがあるということが現場の中で見えると、そのきっかけづくりや環境づくりというものも大事だと感じました。

岡田委員、よろしくをお願いします。

○**岡田委員** 子どもたちにとって失敗は2つあって、1つは受験に落ちたとか、クラブチームでスタメンに入れなくなったとか、そういう少しくじってしまうような体験が、典型的な失敗だと思います。もう一つ、うちは2人とも女の子なので、特に女の子を見ていると、客観的には全く失敗でも何でもないことなのに、恥をかいたからもう学校へ行きたくないとか、友達に顔を合わせられないというメンタルな失敗があります。それは、冒頭にも申し上げましたけれども、今の子どもたちは我々の時代よりもっとステレオタイプに、明るくて、暮らしぶりもよくて、いいものを持っているような子が憧れで、逆にそうではないことは恥ずかしいことというような価値観に侵されている気がします。それはやはり、SNSなどで、本当に欲しい情報、インフルエンサーとか目につく情報を大量に浴びている中で、そういう一面的な価値観があって、その価値観から外れたときに非常に恥ずかしい、失敗した、私はもうお友達と一緒にいられないと感じてしまう。だから、こちらの失敗に関しては、繰り返しになりますけれども、本当に我々大人たちが、先生も含めて、いろいろな価値観やいろいろな世界を見せてあげるように、そんなの失敗じゃないという声かけをしていくことが大事だと思います。

一方、本当の失敗というのは、子どもがつまずいてしまったとき、それを何度も何度も繰り返して、振り返れば自分もそういうことを繰り返して、少しずつ成長していくのだと思います。そのためには、まさに区長がおっしゃったきっかけづくりが大事で、こっちが駄目だったらこっちがあるじゃないかということをお教えることが必要だと思います。

うちの上の娘は、小学校5年生のとき担任の先生と合わなくて、生活が一変しちゃうぐらい接し方が難しい時期があって、そんなときにたまたまお友達のお母さんから他区でやっているバレーボールチームを紹介してもらって、上手くはないのですが、そのチームでいいよ、いいよって褒められたらとても自信をつけて、明るくなって、中学校へ行ってもバレーをや

ると言ってバレー部に入りました。1年生のときは、顧問の先生ととても相性がよくて、夢中になってやっていました。でも2年生のときに、顧問の先生が替わったら途端に相性が悪くて、部活に行かなくなってしまった。きっかけはレギュラーを外されたという小さな挫折だったようです。

要するに、子どもは出会いとかきっかけで、本当にびっくりするぐらい変わりますし、娘はその後、少し低迷期が長かったのですが、今度は好きな美術でコツコツ勉強して、進学できたことでまた今、自信を取り戻して、生き生きと生活しています。結局、こっちでつまずいてもこっちのチームがあるとか、クラスで上手いかないなら部活があるとかきっかけを多く与えてあげることが大事で、また、教育長がおっしゃったいろいろな大人がその子を見てあげることがとても大事ということなのだと思います。

○**区長** 一人ひとりのお子さんが、いろいろな経験や体験をしているので、親の存在も大事だなと感じました。親が子どものいろいろなことを察知して、しっかり導いてあげることもあるでしょうし、学校現場の中では先生であったり、担任以外の先生であったり、友達同士だったり、多分そういうことの中でだんだんに成長して、「生きる力」を身につけていくのだと思います。それぞれの面白いご意見も頂戴できて、参考になりました。

最後に、皆さんおっしゃったように、一番大事なことは、自分の考えを表現する力、伝える力を身につけ、いろいろな仲間とうまくコミュニケーションを取りながらやっていくことだと思います。そうすることで、自分で立派な目標と希望にたどり着いて、自分のやりたい仕事に就いたり、社会に貢献できるのだと思います。また、そういうことが、教育施策大綱の将来像にも書かれています。

「生きる力」を「表現し、相手に伝える力」と考えたときに、その力をどうやって導くのか、自然にそれを促すのか、教え込むのか、この点について、それぞれの教育委員の皆さんから、お考えをお伺いできればと思います。

浅松委員、表現する力、伝える力について、いかがでしょうか。

○**浅松委員** 先ほども言いましたが、学習指導要領の文言が少し難しい部分があったと思います。やはり思考というのは自分でじっくり考えることだと思いますし、それによって自分の考えに根拠をきちんとつけて、そして相手に分かるように伝えていくことが大事だと思います。ですから、先ほど区長がおっしゃったように、コミュニケーション能力ということはすごく大事だと思っています。

ですから、先行き不透明で一人では解決できないところを、人から力を借りて、そして新たに創造していく、解決していくということは大事だと思っています。

探究について言いたいことは、探究というのは、本当に自分でどんな教科でも、単なる総合的な学習の時間だけではなくて、今は教科書も課題解決学習で、いろいろと単元を消化する方法等も丁寧に書いてありますが、自分で試行錯誤しながら、分かることの繰り返しだと私は思います。分かることの繰り返しで、その過程で子どもたちは自分の得意なものを見つけることができる。また、自ら学ぶという主体性を伸ばすこともできる。それから、夢中になる経験とか、最後までやり遂げる経験とかもできる。だから、私は、探究というのは、これからの子どもたちにとっても本当に効果的にいろいろなスキルを身につけられる宝庫だと考えています。

認知心理学者の佐伯さんという方が、「学びの構造」という本を出しています。その本には、覚えたことは忘れてしまうけれども、分かったことは忘れないと書かれています。つまり、暗記勉強ではなくて、本当の学びには探究こそが必要であるという理由がそこにあるのだと感じました。まさに探究というのは、単純に調べていくということではなくて、その過程でいろいろなスキルを身につけていける効果があるだと思います。

○**区長** ありがとうございます。

まさに分かったことは忘れないというのは、表現する力だったり、自信を持って伝える力でもあると思います。さらに言えば、自分の目標に直結していて、やはりその自信が「生きる力」につながるということだと思います。浅松委員がおっしゃる探究は、今日のテーマの一つとして、大変大事なところであると思います。

それでは、岡田委員、表現する力、伝える力、コミュニケーションについてご意見をお願いします。

○**岡田委員** 本当に自分の考えを人に伝えるということは、この年になって仕事をしていてもなかなか難しいことだと感じています。結局、表現する、コミュニケーションを取るためには、前提として、伝えるべき自分の考えを自分の頭で考える必要があるのだと思います。

それから、繰り返しになりますが、違う考えの人もいる、いろいろな価値観がある、そういうことをまず基礎の基礎としてしっかり身につけると、今度はその次の発達段階、レベルに上がったときに、相手の意見を認めつつ、自分の考えも述べられるというようなことにつながっていくのだと思います。

ですから、そういう意味でも、特に小学校、中学校の時代には、我々大人や先生方も本当にいろいろな考えがあって、いろいろな世界があって、いろいろな問題を抱えている人がいるということ子どもたちに教えてあげる必要があると思っています。

○**区長** おっしゃるとおりだと思います。

浅松委員の探究にも近いお話でしたが、伝えるためには、前提としてその内容を自分の頭で考える必要があるというお話でした。その前提をしっかり我々是对応していくことが大事だと、本当にそう思いました。

続いて、阿部委員、お願いします。

○**阿部委員** 私たちの世代は、自分の意見を発表したり、主張することは、あまりトレーニングをしていないし、強い自己主張をすることはむしろ控えるべきだと習いました。だいたい価値観とか考え方が共通しているから、言わなくても何となく通じるという、非常にある意味ではいい文化なのですが、やはりそういうトレーニングをしていないことは、これからの時代スタートとしては不利な面もあると思います。

私も昔、学生だった頃のことを振り返ると、何か発表するのが恥ずかしいから嫌だと思ってためらったり、やむを得ず最後に発表するような性格でした。しかし、いろいろな体験や話さなくてはならない機会を重ねるごとに、だんだん人前で話すことが苦にならなくなりました。これはトレーニングの成果なのかもしれません。

今の子どもたちには、どんどん発表する機会を作ってほしいし、いろいろなことを体験してほしいと思います。学校行事とか地域の行事とかでもいろいろな役割を与えたりして、とにかくいろいろな体験をすることで、コミュニケーション能力も上がるし、発表する力もつ

きます。また、そういう役割を果たすことで自己肯定感も自然に生まれてくると思いますので、できれば行政とか学校も意図的にそういう機会、体験する機会を子どもたちにいっぱいつくってあげてほしいと思います。その中で子どもたちが自然に、自分でいろいろな気づきを持ったり、自分を表現する能力を身につけていけるのだと思います。

○**区長** 阿部委員と私も全く一緒に、皆さん信じられないかもしれませんが、昔は、私も全然人前で話せなくて、本当に内気な性格で、指されて立つと顔が真っ赤になってしまうような子どもでした。しかし、いろいろ経験を積んで、今では人前で話をすることが多い仕事をしています。確かに、そういう発表する機会とか経験を積ませることによって自信もつきますので、それが我々大人や地域、学校現場の教員の役割なのだと改めて感じました。ありがとうございました。

それでは、岸田委員、お願いします。

○**岸田委員** 私が主任民生児童委員になったときに、東京都民生児童委員連合会からまずトレーニングされたのは、自分の考えを伝えることよりも、相手の話を聞く力でした。相手の話をどこまできちんと聞けるかという訓練です。コミュニケーションには一方的に話されることだけではなく、相手の言い分、そしてそれが本心なのかどうかを含めて聞く力も当然必要になってくると思います。

民生児童委員として一番大事だと思ったのは、まず意見を言われたときに否定をしないということ。まず一旦、そうですね、そう思っただけなんですという形で、一度自分の中で話を聞いてから自分の意見を言うようにしましょうという形で訓練を相当しました。訪問時においても、まず相手のお話を聞くということをたくさんやってきました。ぜひ子どもたちも、一方的な意見だけではなくて、相手の意見を聞くということも必要な場面が出てくると思っています。表現する力、伝える力が大事ですが、コミュニケーション能力という意味では、聞く力も同じくらい重要なことだと思います。

○**区長** 確かにおっしゃる通りだと思います。非常に参考になりました。

もうそろそろ時間になりました。子どもたちに身につけてほしい「生きる力」につきまして委員の皆さんから様々なお話しいただきましたので、教育長にご意見、ご感想、そして最後に取りまとめをお願いしたいと思います。

○**教育長** 教育委員の皆様にご発表していただいたことは、全ては必要なことと考えています。浅松委員の言われたように、スキルとして探究というのはとても必要なことだと思います。それと、私がとても重要視しているのは、他者と協力しての解決です。浅松委員もそれを踏まえておっしゃっていたと思います。

それで、今の世の中というのは、専門性がとても高くて、それでいて、さらにいろいろなことが絡み合っているのです。一人で社会を切り開いていくことは難しいと思います。ですから、様々な専門性、様々な意見を持った人たちが集まって、知識を出して行って、それで総合的に立体的に検討して、社会を切り開いていくことが非常に重要だと思っています。

そのため、今、墨田区では、GIGAスクール構想の第2弾として、ジグソー学習を推奨していて、各学校でやってもらうことになっています。ジグソー学習は、各パーツに分かれて、そこを1人が研究をして、自分のグループに戻って、各分野の、例えば3つなら3つに分けた人がそこでプレゼンをして、みんなに分かってもらう。それで、その中から順番でま

た発表者を決めるということをしてGIGAスクール構想の中身として行います。それはなぜかという、今まで、発表のために模造紙を書く時間がとても長かったのですが、電子模造紙を使えば自分で書いたものがそのまま使えるので、模造紙を書いていた時間を考える時間に充てて発表することができます。それも、1人の発表者ではなくて、3人いたら各分野に散らばって、また戻ってきて、他の2人に対して説明をします。そのときに、自分が習ったことをやるのではなく、相手にいかに伝えるか、いかに分かってもらえるかという視点でやると、深掘りにもつながっていきますので、そういった形で今、墨田区では進めています。この中でプレゼンも必要だし、あとは3人で違う分野を研究するので、他の分野についてよく聞いて質問をすることが必要になりますから、先ほど岸田委員がおっしゃった、聞く力もそこで育っていくことになります。

あと、少し発表がうまくいかない子もいますが、そのときは他の2人がその子を思いやって、発表しやすいように少し質問を入れたりとか、そういった工夫をすることできるので、ジグソー学習というのは使い方によってはいろいろなことに展開できます。それで墨田区では、ただ単にICTを活用したジグソー学習ではなく、そういった非認知能力を伸ばしていくことも同時に進めていきたいと考えています。

先ほど区長から質問がありましたが、こういったコミュニケーション能力というのは、基本的には学習の中で促していくことが基本だと私は考えています。ところが、スキルについては、やはり教え込まないと、いつまでもプレゼンが浅いものになってしまいます。少しスキルを教えるだけで、子どもたちのプレゼンはもっと深くなると思います。

ですから、コミュニケーションの力は促すことが基本で、スキルについては教え込むということが補助的に必要だと考えています。

○区長 ありがとうございます。

それぞれいただいたご意見は学校の現場の皆様にも大変参考になるものだと思います。また、学校現場での取組がいいというお褒めの言葉もたくさんあったので、これは本当に励みにもなるのではないかと思います。

こうやって教育委員の皆さんが考える「生きる力」を、それぞれのお立場で経験も含めて、いろいろとご披露いただいた会議になりましたが、お話を聞いて、自分自身にとっても大変ためになる、参考になる総合教育会議だったと感じています。

引き続きこういう形で、いろいろな意見交換をしていながら、最終的には墨田区の子どもたちが「生きる力」を持って、元気に目標と夢と希望を持って生活をしてもらうということが大事でございますので、引き続きよろしくお願ひしたいと思います。

それでは、これで第17回墨田区総合教育会議を閉会いたします。

委員の皆様、どうもありがとうございました。傍聴の皆様、ありがとうございました。

午後0時00分閉会